

居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み

小沢 一仁*

Place and Identity by Phenomenological Approach

Kazuhito OZAWA

The word 'place' is often heard in Japanese daily conversation. This study suggests that some of the young adults in identity crisis cannot find the importance for their living in their societies and struggle to seek their own places in their societies. The word 'place' suggests two meanings of it being taken literally and physically, and of comfortness a person perceives about the place. If a college student feels that he/she does not belong in the college, it signifies that the student feels uncomfortable in the college that is a concrete place to which he/she belongs.

The following circumstances cause their uncomfot in a place. First, the circumstance is that people are not allowed to obtain what they seek for their life despite their effort. For instance, a college student, who desires to study psychology, is not provided an opportunity to study psychology by his college. Second, the circumstance is that people lose their needs at a place. This is an example that a student has indefinite idea of what he/she intends to study in school and the purpose of going to college.

Erikson (1959) developed the idea of crises in life. Those who are unable to obtain a comfortable place anywhere potentially fall into identity crisis in terms of his theory. In other words, they are assumed that they have lost what is important for their living in the society.

This study found that those who face the situation should clarify what is their own value in society. They also should obtain their own place in the real situations in order to regain their own identities. Adolescence is a period of young people who are socialized. They come out of their own comfort home through school lives and then go into society. Young adult should be confronted with time to rethink what they acquired under the influence of their parents and teachers in their childhood, in order to find what is important for their living in the society.

1. 自己理解のために、生活世界という視点を取る

自分を知りたいという人間、自分を知りたいという学生、自分を知りたいという筆者自身。自己理解への思いがある限り、自分を知ることが明らかにする意義はあるといえる。

まず、この自分を知ること、いかなる視点

において捉えるか、いかなる側面において捉えるか。

ひとりの人間は、様々な側面、視点で捉えられる。例えば、身長という点で自分を知りたい、体重という点で自分を知りたい、というならば、身長計に乗り、体重計に乗ればいい。それでは、こうして生きている自分を知りたいとするならば、どうするか、どのような視点を取るか。

本論では、生活の中で生きている自分自身を知るこ

* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター助教授
2002年9月10日 受理

とを試みる。そのために、フッサールの、生活世界という概念にまず着目する。彼の指摘を、集約して解釈し提示すると以下ようになる。生活世界とは、日常生活をおくっている人間の世界自体を意味づけているものであり、根拠づけているものである。学問の対象としては客観的科学的的世界があり、それに対する生活世界とは、主観的であいまいであり、学問の対象とはならなかった。さらに、これまで疎かになっていた、生活世界こそ、前述したように日常生活を送っている世界のみならず、客観的科学的的世界自体の根拠となるものである (Husserl, 1954)。

心理学理論には、様々のものがある。それは、特に、科学的客観的真理を目指す方向性においては、生活世界は対象にならない。なったとしても、いかにして、客観的科学的的方法において、日常の世界を切り取り、客観的科学的的世界にもっていくかが主眼とされる。しかし、その結果として提示されたものは、日常の世界、さらには、生活世界においての自己理解にはあまり寄与するところはない。それは、目的が違うのである。心理学の研究としての文脈の中において、科学的客観的世界の中で、自分を知ることはできる。しかし、それでは、個人はひとつの点としてプロットされるだけである。そこで、この心理学の方向性とは異なり、客観的科学的的世界においてではなく、生活世界において、自己理解への方向性を取る必要がある。

そして、日常の世界と生活世界を対比させてみると、こうして生きている自分は、まさに日常の世界に、生きている。つまり、日常の生活にいて、こうして生きている自分を根拠づけているもの、つまり、生活世界における自分を知ることが自己理解であるということができる。つまり、日常の世界から入って、生活世界における自分へとたどることが、自己理解であると本論では捉える。

2. まず、日常の世界におけるこうして生きている自分を居場所において捉える

では、まず、日常の世界の中で、こうして生きている自分をいかにして捉えるか。この日常の世界の中で、こうして生きている、自分を捉えることができる言葉はないだろうか。日常の世界とこうして生きている自分を、分離しないで捉える言葉はないだろうか。そこで、居場所という言葉を用いて、日常の世界でこうし

て生きている自分を知ろうとすることを試みる。

第一に、居場所に着目する理由は、居場所とは日本語にある通常使われている言葉であり、「居場所がある」、「居場所がない」と、日常会話で用いられているからである。日常的に全く用いられていることがない言葉であると、日常の生活をこうして生きている自分からは、離れていってしまう。

第二に、居場所という言葉を用いると、人が日常生活に生き、この社会に生き、生活していることに焦点を当てることができる。生きることをどうやって見つめて、さらにはどうやって自分自身によって工夫していったらいいかということを考えると、居場所という見方は、自分が生きている日常生活の中での自分を捉えることにふさわしいと考えられる。日常生活の中から、個人を切り取らない、日常生活の中の個人を生きているままに捉えるにはどうしたらいいか。それが居場所という見方である。自分と生きている世界をとものに、捉えることができる言葉であるといえる。

第三に、居場所とは、個人が主観的視点で確かめられるからである。この点が、自己理解においては重要である。たとえば、自分が今お金をいくらもっているかは、今の自分の財布を見ればわかる。では、自分が全部で今いくらもっているかは、家にあるお金と、貯金通帳を見る等々、それぞれのところにあるお金を調べて合計すればわかる。このことは、居場所も同様である。後に見るように、自分には居場所がいくつあるか、それぞれの居心地はどうか、と訪ねられたら、もしくは、自分に問いかけた場合、どこに行かなくても何を見なくても、誰かに尋ねなくても、自分が自分を振り返り、省みれば、自分を見つめれば、わかる。これが、主観的視点で捉えることである。例えば、ここで、心理テストを取り出す必要はない。投影法をしなくてもいいし、質問文に答えなくてもいいし、何かの点数を操作しなくてもいい。居場所という言葉には、主観的視点を取ることで、個人が自分の主観によって、自分自身を省みることができるということに意義がある。

最後に、居場所に着目する理由は、アイデンティティに辿り着くためである。アイデンティティ概念を提唱した、エリクソンは、ある居場所、適所を得ることで、自分のアイデンティティをつかむという (Erikson, 1959)。日常の世界において、激動する時代の波に飲まれたり、個人に大きな変化が生じたりするようなこ

とがなければ、アイデンティティが問題になることはない。しかし、日常の世界においても、アイデンティティの問題がかいま見られるときはある。その際に、日常の世界の根拠となる、生活世界を明らかにしていくことは、同時に、アイデンティティの問題をも露わにしてくことであると考えられるのである。

つまり、日常の世界における、居場所を明らかにすることから、それを入り口として、アイデンティティへと迫っていかうとしているのである。

3. 居場所を捉える、基本的な見方の提示

ここでは、筆者がこれまで行ってきた居場所への基本的見方(小沢,2000,p103-104)を再提示し、さらにまとめてみる。次章以降では、これを踏まえて論を進めていきたい。

まず、どこでもいいのであるが、自分にとっての居場所をあげてみる。大学、家、職場、等々、例えば、今の自分にとっての居場所はどこか、何かと省みる。

すると、まず、自分が居る、具体的な場所が思いつく。つまり、日常の世界の中で、生活の中のどこかに、自分が居る具体的な場所が、居場所となる。ただ、自分が居るすべての具体的な場所が、居場所となるかというそうではない。この点については、居場所の選択という重要な問題なので、後述することとする。

次に、居場所が意味しているところは、具体的な場所のみかというところだけではなく、我々が居場所というとき、例えば、「ここに自分の居場所がある」「ここには自分の居場所はない」と語るときには、その具体的な場所についての自分自身の感覚、居心地についての意味も含んでいる。つまり、居場所とは、具体的な場所に加えて、その場所にいる自分の居心地が一緒になった言葉である。

では、次に、ある居場所にいる自分から、その居場所を眺めてみると、どうなるか。すると、居場所においては、自分一人の場合もあるが、他者の存在がある。たった、ひとりの居場所という場合もある。しかし、多くの場合、居場所は、その居場所を共有する他者がいる。例えば、家庭では、親やきょうだい、祖父母などがいる。学校では、教師、友人、先輩、後輩などがいる。職場では、上司、同僚、後輩、顧客などがいる。

さらに、居場所においては、自分は何をしているのかという、何かをしている、自分が何かに打ち込ん

でいる。勉強であったり、談話であったり、仕事であったり、趣味の内容であったり、それぞれの居場所においては、自分が行う対象があり、打ち込む対象があるといえる。休息や睡眠という場合もあるが、それも対象に含めることができる。これは後に見ていくのであるが、休息という居場所が、その本人の全体の居場所の中で、どのような意味づけがあるかということを見ていく際に、有効であるからである。

最後に、居場所における自分は、対象と他者との関わりの中での自分である。それは、自分という人間の中にある、様々な側面の内のひとつを表現し、現すものである。例えば、家庭では、家庭という居場所における自分である。それは、大学や職場という居場所における自分とは、当然重なるところはあるが、まったく同じ、役割をしている自分ではなく、同じ面を出して生きている自分ではない。例えば、学生を例にとると考えると、大学という居場所における自分とは、大学において同級生の中で、勉強もしくは別のものに打ち込んでいる自分が、他者という同級生との関係の中である種の、役割、言い換えれば、自分を生きているのである。つまり、他者の中での、位置づけや、役割という色づけがなされた自分が、居場所における自分なのである。そして、先に述べた、居場所における居心地とは、このような、対象と他者との関わりにおいて自分が感じる、感覚なのである(図1. 参照)。

このような居場所は、本人をめぐる、生活の中でいくつもあり、全体の姿を描くと仮に図2のようになる。多くの場合、一人の個人は、居場所を4, 5個は持っていると考えられる。当然、ひとつしか居場所がないと感じる人もいれば、10以上もっていると感じる人もいるであろうし、まったく居場所がないという人もいるであろう。また、ひとりのある人の全体の居場所は、ひとりの個人をめぐるゲシュタルトをなしていると考えられる。

以上のことを、居場所を考える上での基本的な見方として以下の論を進めるのであるが、ここまで示してきたものは、日常の世界において、こうして生きている自分の姿を、居場所を通して見たものである。次章以降で、居場所について現象学的方法を取り入れて、日常の世界から生活世界へとすすみ、アイデンティティに迫っていくことを試みる。

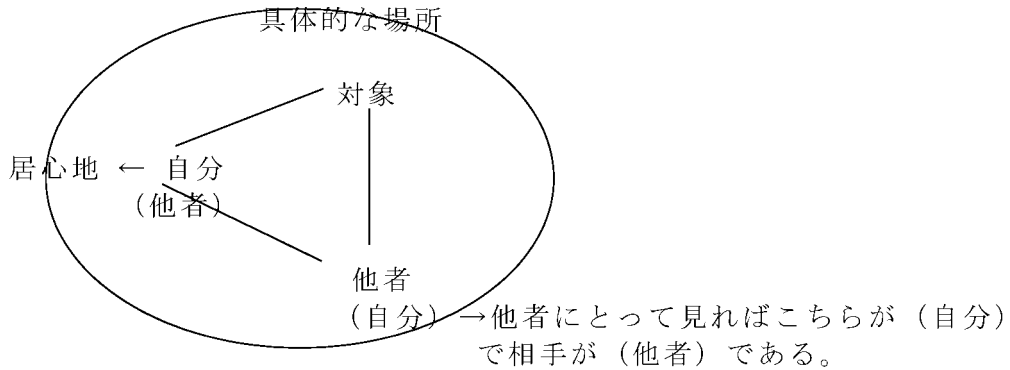


図1. 居場所を見る基本的な見方

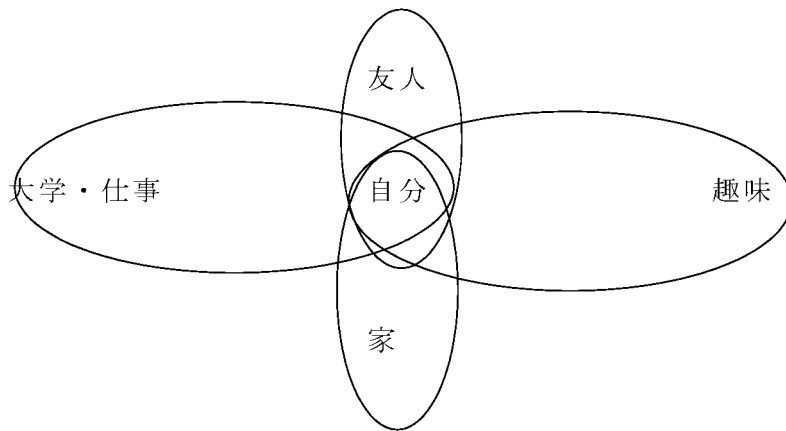


図2. ひとりの個人の居場所全体の姿の例示

4. 居場所について現象学的方法を適用してみる

(1) 竹田及び西による現象学理解

竹田は、フッサールが提唱した現象学を、主観の内部における「確信成立の条件」を明らかにする学問であると捉えている（竹田,1986 p42）。例えば、目の前にリングがあり、私は目の前にリングがあるという確信を持っている。この私における、目の前にリングがあるという確信はいかにして生じるか、その条件は何かを主観のうちに探ろうとする。竹田は、単純化して表現し、ここにリングがあるから、目の前にリングがあるという確信が成立するので

はなく、私の主観のうちに条件があるので、目の前にリングがあるという確信が成立すると捉えるというのである。さらに、西は、現象学を、「世界や事象の客観性の、ひいては自然科学や社会科学の真理性の、意味と根拠を解明」するものであると述べている（西,2001 p160）。

このように、竹田及び西に倣い、「主観における確信成立の条件」を明らかにすること、その意味と根拠を明らかにすることと、現象学と捉える。そして、居場所についてこの見方を適用し、居場所について現象学的方法を用いることを試みるのである。

(2) 居場所をめぐる研究の方向

さて、居場所について考えてみると、人がどんな居場所を挙げるか、ある人は数多くの居場所を挙げ、ある人は少ない数の居場所しか挙げない。その違いがどこにあるか、を明らかにする方向もある。また、ある居場所において、居心地がいいという人と居心地が悪いという人がいる、その原因はどこにあるか、を明らかにする方向もある。例えば、ある人が居場所を多く挙げる要因や、ある居場所の居心地の良さ・悪さの要因を、外的な状況に置くまたは個人の性格特徴に置いて、明らかにする方向も取り得る。

具体的には、居心地のよい居場所をもっていることと、関連する要因を探すという研究もあり得る。その要因を、個人の性格特徴や置かれている環境、親との関係、友人の有無、等々に置き、調査することができる。このような見方や研究もひとつの方向であり、居場所における研究としては重要である(白井, 1998a, 1998b, 都築, 1998)。しかしここでは、現象学的方法は、用いる必要はない。現象学的方法を用いると、外的な状況や、心理的特性に、原因を求めない。さらに、先にみた竹田及び西の指摘による、主観における確信成立の条件における、その確信とは、ここでは、実感といえる。つまり、居場所をめぐる確信、言い換えると、実感が生じる、その条件、言い換えると、根拠を明らかにすることが、居場所に現象学的方法を適用するものであると考えられる。つまり、その個人の生活において、居場所をめぐる実感を挙げるもと、根拠となるものを、主観のうちに明らかにする方向を目指すのである。

(3) 居場所をめぐる実感とは

「自分にとって、居場所はどこか? いくつあるか?」と問いかけたとき、こことあそこ・・・家庭と、大学のどこそこと、職場と、趣味と、等々、居場所がこれとこれと、実感をもって、具体的に言うことができる。このように、自分の居場所を挙げるのできる実感にまず、注目する。

次に、「それぞれの居場所における居心地はどうか?」と問いかけたとき、ここの居心地はとてもいい、あそこは悪い等々、それぞれの居場所における居心地を、実感をもって言うことができる。このように、居場所における居心地についての実感に、注目する。

現象学的方法、つまり、主観における確信成立の

条件、意味・根拠を明らかにする方法を適用すると、実感を持って居場所を挙げるのできることで、そして、実感を持って個々の居場所の居心地を挙げるのできることで、このふたつの実感が成立している条件、つまり、根拠、もとにあるものを明らかにしようとするものである。

居場所を挙げられるもとにあるものは、なにか。しかもそれを、個人の側に、しかも、主観の中に探すのである。さらに、ある居場所の居心地は、いかなる根拠によって生じているのかを探していく。このように、個人の主観の内に、居場所を挙げるもと、及び、居場所の居心地のものを探ることが、現象学的方法を居場所に適用することである。すると、なぜ人は、居場所を挙げるのでき、それぞれの居心地を実感するのできるか、この問いを、主観の内において考えるのできる。

(4) なぜ人は、居場所を挙げるのでき、それぞれの居心地を実感するのできるか?

① 居場所を挙げる基準に行き着く

まず、なぜ人は、自分の居場所を挙げるのできるかを考える。ある場所を、自分の居場所として挙げる人がいるとする。しかし、同じ場所を別の人は、自分の居場所として挙げないこともありえる。さらに、一人の個人においても、物理的に人が居る場所が、そのまま、その人が自分の居場所として挙げるわけではない。そこには、選択が働いている。つまり、居場所を挙げる基準が、居場所を挙げるもととして、根拠としてあると考える。

さて、では、この居場所を挙げる基準をいかなるものとして捉えるか。例えば、仕事を持っているある人が、職場を居場所のひとつとして挙げた場合、当然、働くことがその人にとって、自分が生活する上で、生きていく上で、重要なもの、大切なもののひとつであると捉えているからである。大学生である学生が、大学を自分の居場所として挙げたとする。彼または彼女は、大学に行くことを当然、自分の生活にとって、重要で大切であると捉えているといえる。つまり、その本人にとって、生活していく上で、生きていく上で、大切なものは何かということが、居場所を挙げる基準としてあると考える。

② 居場所の居心地からも、居場所を挙げる基準へ辿

り着く

例えば「大学に居場所がない」という学生のコメントは、居心地の悪さがある場合とない場合がある。居心地が悪い場合は、大学に居場所を探そうとしても見つからない状態である。居心地の悪ささえない場合は、大学に居場所を見つけようとはさらさら思っていないのである。社会の中で生きる上で何が大切かという見方をすれば、居心地の悪さがない場合は、大学という場所に、自分が社会の中で生きる上で大切なものは何もないと感じ、大学には何も求めているということである。つまり、居場所の居心地の実感、自分が生きる上で、大切なものがあってこそ、生じるものである。

では、ある居場所において居心地のよさを実感でき、また別の居場所では居心地の悪さを実感できるのはなぜかを考える。それは、ある居場所において、社会で生きる上で何が大切かとその人が思うものがその場所において、どれくらい得られているかが、その居場所の居心地のもとにあると考えられる。そして、大切だというものが充分得られていれば、居心地はよいと実感される。逆に、大切だというものが得られていなければ、居心地は悪いと実感される。

特に、居心地のよさや悪さの理由として、その居場所における自分を取り巻く人間関係のよさや悪さを挙げることがある。それは、その居場所において、他者との関係の中で暖かい交流こそが大切としている思いがそのもとにあるといえ、言い換えれば、暖かい人間関係をその居場所ではしい、得たいと感じていることからといえる。さらに、このことは、暖かい人間関係こそが、社会の中で生きる上で大切なものという、居場所を挙げる基準を多くの者がもっていることを示していると考えられる。

(5) 居場所をめぐる、葛藤を伴うこともあるダイナミズム

①心理社会的価値観

さて、ここまで説明を行ってきたが、居場所を挙げる基準と居場所の居心地の発生を、さらに、見つけていくとそこには、うごめく、心の動きがある。つまり、葛藤を伴うダイナミズムがある。

この、自分が生活していく上で大切なものは何か、ということ、居場所を挙げる基準としたが、これを言い換えると、価値観といってもいいといえる。

個人が社会の中で生きる上で、社会の側にある、社会で生きる上で何が大切かという価値観を、個人が様々な影響を受けて取り入れ選択し、自分の側にひきもどし、社会の中で生きる上で自分が何を大切にしているかとする、価値観である。エリクソンの見方を取り入れれば、心理社会的な (psycho-social) ものであり、よって心理社会的な価値観ということもできる (Erikson, 1959)。

②価値観の捉え直し

無藤は、アイデンティティ・ステータスの領域のひとつとして、価値観の領域を提唱している (無藤, 1979)。そこでは、アイデンティティにおける価値観の領域が重要性が示されている。本論では、価値観を先に述べたように、心理社会的なものとして捉え、個人がもつ居場所において、その基準、根拠となっているものとして捉えている。つまり、本論で述べている、心理社会的価値観とは、自分が生活していく上で大切なものは何かであり、切実に現実生活に密接しているものである。価値観というと、目標であったり、理想であったり、方向性であったり、と捉えられることもあるが、本論では、日常生活の中で居場所に密接に関連した、もっと言えば、染みついているように、現に大切にされているものを指している。

③現代社会の問題

個人と社会との関係を、心理社会的として捉えてみた上で、現代社会を考えてみる。すると、様々な文化が交差する、現代社会は、ひとつの価値観が共有されている時代ではない。様々な価値観が錯綜し、混乱し、混在している時代である。このような現代社会の中で、個人が自分の生きる価値観を明確にすることは、難しいことであるし、試行錯誤しつつ、手に入れつつ確かめつつ、生きていくしかない。その中で、自分にとっての価値を試しつつも、見出していくものが、居場所を挙げる基準となっていくといえるし、そこから、居場所の居心地も生じるのは先に見たとおりである。つまり、社会の中で自分にとって大切なものは何かという、心理社会的価値観をめぐるうごめく心のダイナミズムがあると捉えることができる。ここで、明らかにしようとしていることは、心理社会的価値観を分類したり、大別したりすることではない。ひとりの個人における、自

分にとっての居場所の基準をめぐっての、心の動きをダイナミズムという言葉で、明確にすることである。

④心理社会的価値観をめぐるダイナミズムを主観的な感覚から捉えてみると

まず、ひとつの居場所における、対象と他者と本人のトライアングルをもとに、ダイナミズムについて考えてみる。そこで、はじめに、本人が打ち込む対象についてみてみる。

先に述べた、社会の中で生きる上で何が大切かという心理社会的価値観は、現実の意識としての言葉では、「自分はこれをしたい」「自分がすべきことはこれだ」「これこそが自分のしたいことだ」という表現で、発せられるものであると考えられる。

そこでは、当然、競合する場合もあるし、自分にとって何をしたいのか、すべきか、わからなくなることもあるだろう。つまり、何を大切なものとするかを明確にすること自体における葛藤があるといえる。

さらに、現実の壁において、自分が大切とすることができなかつたり、否定されることもありえる。この場合も葛藤にさいなまれることとなる。

これに対して、まだ、現実には実現してはいない

が、その中でもヴィジョンとして見通しが感じられる場合は、その大切なものを堅持することができるだろう。また、その大切なものを背景にしてある居場所において、対象に打ち込んだ際に得られる、やり甲斐や生き生きとした感覚があることも、その大切なものの堅持には必要であり、有効であると考えられる。

次に、居場所を共有する他者との関係についてのダイナミズムについてみてみる。他者からの承認は、居場所の居心地を左右するものとなりうる。しかし、当然、他者から承認されない場合もあり得る。他者との間で、大切なものは何かということが、共有される場合とされない場合がある。そして、さらに、その大切なものについて、自分自身が到達していないと他者から評価されることもあり得る。また、他者が別の大切なものを提示してくることもあり、それによって、自分の持つ大切なものが揺らぐ可能性もある。

以上のことを図示すると図3のようになる。

さらに、このようなひとつの居場所をめぐるダイナミズムから、複数の居場所における関係、つまり、ひとりの個人の居場所群における全体のゲシュタルトにおけるダイナミズムを考えていくのである

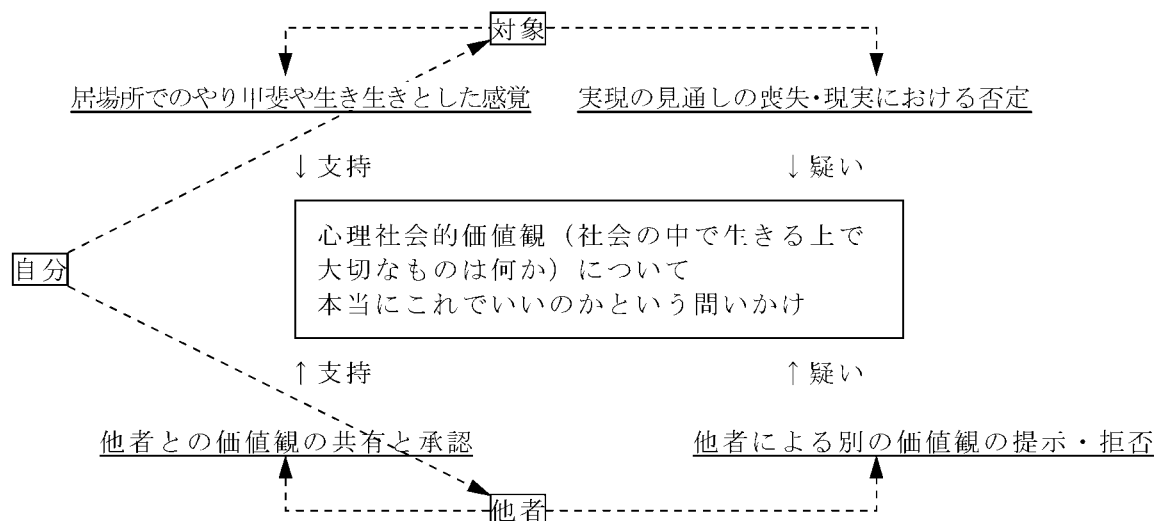


図3. 居場所の基準である心理社会的価値観をめぐるダイナミズム

が、これについては、アイデンティティにおいて後に述べる。

5. 居場所からアイデンティティを考える

(1) アイデンティティとは～筆者の捉える見方

エリクソンは、アイデンティティの感覚とは、自分自身の空間的な斉一性と時間的な連続性 (sameness and continuity) に対する自他承認の感覚であると述べている (Erikson, 1959)。このことから、筆者は、アイデンティティ自体を斉一性と連続性と捉え、さらにアイデンティティを、「私が私であること」、「自分が自分であること」と捉えている (小沢, 1998, p23)。いかなる自分が、前者の自分で、いかなる自分が後者の自分かという、前者の自分とは、主観としての自分である。そして、後者の自分とは、この時代にこの社会にこうして生きている人間としての自分である。先に示した、居場所の全体図における自分こそ、後者の自分である (図 4)。

また、アイデンティティの感覚を得るとは、私が私であることを納得して受け入れることができるこ

と (私=私) であるといえる。逆に、アイデンティティ危機とは、私が私ではない (私≠私) と感じられたり、いったい私は誰だ? (私=?) と感じられることであるといえる。つまり、私が私であることを納得して受け入れることができないことである。

(2) 実存的視点においてアイデンティティを捉える、心理社会的価値観を問い直す作業

後者の自分、つまり、この時代にこの社会にこうした人間として生きている自分は、エリクソン (Erikson, 1959) の提示した生涯発達をライフサイクル (life-cycle) とした見方から見ると、常にある発達段階にいる。例えば、誕生から、乳児期、幼児期、児童期を経て、青年期にいる自分、成人期にいる自分、中年期にいる自分、老年期にいる自分、そして死に至る、ライフサイクルという人生の道のりの途上にいる自分である。さらに、この時代にこの社会にこうして人間として生きている自分は、選択されたものではなく宿命的なものである。このように、誕生から死までの間のライフサイクルを、宿命

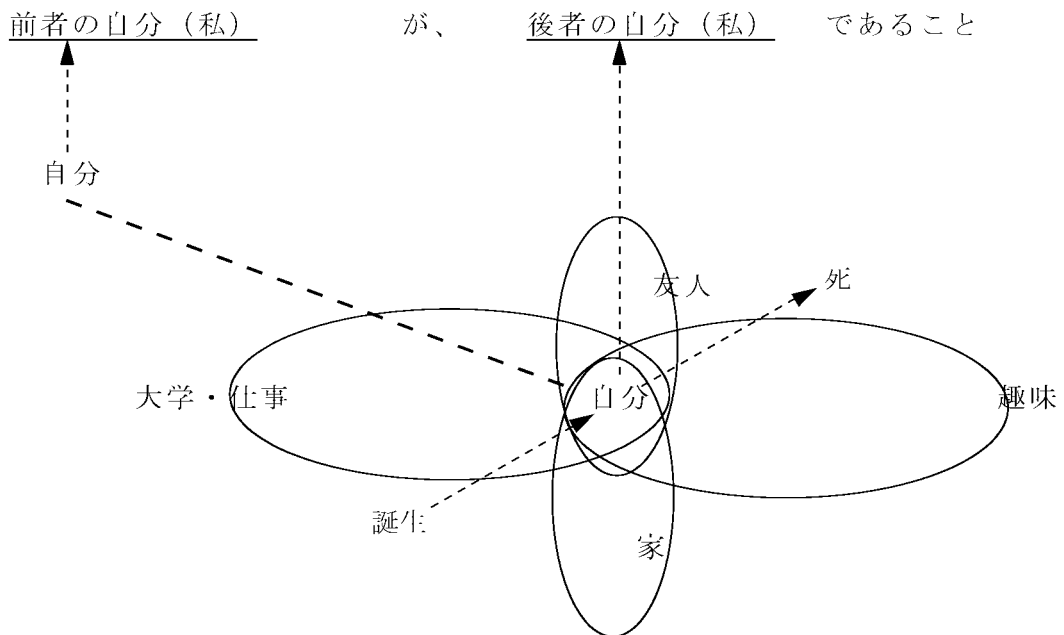


図 4. 主観としての前者の自分と、居場所群全体としての後者の自分の例示

的な自分として生きていることを、実存とここで捉える。つまり、この時代にこの社会にこうした人間として生きている私は、実存的視点で捉えると、誕生から死までの間のライフサイクルを、宿命的な自分として生きている。そして、こうした自分を、いかに納得して受け入れるかが、アイデンティティの問題であるといえる。筆者はこのように、実存的視点でアイデンティティを捉えており、このような見方で捉えたアイデンティティを、実存的アイデンティティと言うことができる。

(3) 実存的視点においてアイデンティティを捉え、心理社会的価値観を問い直す

実存的視点にまでアイデンティティを捉える見方を展開していくのであるが、ここから、先に示した居場所についての考察と関連づけて考えていくこととする。

実存的視点で捉えられた、アイデンティティ、つまり、私が私であること、自分が自分であることは、主観である前者の私によって、後者の自分が見つめられる。後者の生活の中でこうして生きている人間としての自分は、先に見たように、いくつかの居場所をもっている。そして、ひとつの居場所から、その居場所の居心地から、そして、その居場所を挙げた根拠から、自分で省みれば、最低でもひとつの心理社会的価値観を明らかにすることができる。さらに、この心理社会的価値観をめぐって、心の動き、つまり、ダイナミズムがあることは先に示したとおりである。そして、ひとりの個人が、自分にとっての居場所をいくつかもっているということは、それと最低でも同数の心理社会的価値観をもっていると言うことができる。つまり、いくつかの心理社会的価値観も組み合わせ、全体のゲシュタルトをなしていると考えられる。このゲシュタルトは、いくつかの心理社会的価値観が、協調したり、競合したり、対立したり、補い合ったりしていると考えられる。

そして、これらの心理社会的価値観は、自分が自分であることを納得して受け入れるときの基準となるものである。つまり、自分が自分であることは、当然なことであるし、疑いのないことである。しかし、人は時に自分が自分であるとは思えなくなったり、自分が誰かわからなくなったりする、アイデンティティ危機に陥る。ある基準によって自分を省み

たときに、その基準に到達していないときは、自分を否定してしまう。さらに、いかなる基準によって、自分が自分であることを受け入れたらいいかわからなくなってしまうときには、どうなるか。このような自分が自分であることの基準を見失ってしまったときには、自分が誰かすらわからないと感じてしまうだろう。

居場所を挙げる基準と、自分が自分であることの基準は、同じ心理社会的価値観であると考えられる。つまり、居場所を挙げる基準である、心理社会的価値観を、実存的視点でもう一度振り返り問い直したものが、自分が自分であることの基準となるものであると考えられる。そして、自分が自分であることの基準である、心理社会的価値観とは、その個人が、その時点で核心的で中心的で最も重要とするものであると考えられる。ある心理社会的価値観をもった際に、ある居場所で求めるものが得られなかったとき、それが高じて自分が自分であることにとって何が重要なものかわからなくなってしまうとき、アイデンティティ危機に陥ると考えられる。

(4) 心理社会的価値観の変化を引き起こす他者

青年期とは、家庭及び学校から、社会へと青年の居場所が移り変わっていく時期である。アイデンティティ危機に陥る青年は、社会の中での自分の居場所を探しながら、子ども時代に親及び教師に影響を受け取り入れた、心理社会的価値観を自分自身が問い直し、捉え直すことに悩み、葛藤しているといえる。

青年期に入り、身体的精神的に成長し、さらに、自分で思考できるようになり、これまでの、家族、友人、学校以外の、居場所における他者に出会う。特に友人関係は、親から自立する家庭にある青年において、発達上重要な意味を持つ (Blos, 1959、Sullivan, 1953)。

新しい居場所において出会う、他者は、その居場所における心理社会的価値観をもっている。そこで、これまでとは異なる心理社会的価値観に出会う可能性がある。つまりは、他者との出会いは、新しい心理社会的価値観との出会いということである。

例えば、教師、先輩、友人、異性等との出会いによって、その他者に魅力を感じるということがある。それは、自分とは異なった、心理社会的価値観に対して魅力を感じているものと考えられる。さらに、

自分のこれまでもってきた心理社会的価値観に真っ向から対立する他者と出会うこともある。そして、相手の価値観に自分の価値観が否定されたり、逆に、自分の価値観で相手の価値観を否定したりすることもあるだろう。このようにして、他者との出会いにおいて、心理社会的価値観をめぐる、変化が生じそして葛藤が生じる可能性が常にあると考えられる。

(5) 問いと答えのダイナミズム

居場所を挙げる基準であり、アイデンティティという自分が自分であることを確認する基準が、心理社会的価値観であると捉えてきた。そして、これは、変化する可能性があり、それは当然、葛藤を持ち続ける可能性がある。

心理社会的価値観、つまり、「自分が社会の中で生きる上で大切なものは何か？」という問いは、自分を振り返って行く問いかけである。このような問いは、折に触れて頭の中をめぐるてくることがある。この問いに対し、実感を持って答えられるというダイナミズムをもっている場合がある。例えば、「自分の本当に大切なものは何か？」という問いが頭をよぎったり、他者に問われたりしたとき、「これだ!」と言える場合がある。その際は、実感をもってその理由を答えることができる。その実感は、居場所における居心地に関連しており、感覚的に確かさを実感できるものである。それは、対象に打ち込んで得られた生き生きとした実感であり、その居場所の他者から承認されているという実感である。つまり、心理社会的価値観というものを問うたときに、それをある居場所の居心地の実感において、確信をもって答えられるという、ダイナミズムがある。つまり、自分にとって大切なものは何かという問いに対して、居場所の居心地の実感をもって答えるという、問いと答えのダイナミズムが動いているのである。

これに対して、葛藤を引き起こすダイナミズムとなってしまう場合もあるだろう。「自分にとって大切なものは何か？」という問いに対して、「これか?」「あれか?」「本当はどれだろう?」という問いが、問いを呼び、答えられる実感がない。これが、葛藤をもつダイナミズムである。また、対立した心理社会的価値観の狭間にいる人間は、問いに対して、二つの答えの中で揺れる。そして、どちらの答えに、

自分をゆだねるか、迷うだろう。

6. まとめ

アイデンティティを私が私であること、自分が自分であることと捉えることは、アイデンティティにおけるダイナミズムを捉える上で、起点となっている。固定的なアイデンティティ観を持ってしまうがちな傾向もあるが、西平直による「ズレ」(西平直,1993,p215)や溝上による「同一と差異のあいだの揺らぎ」(溝上,2002,p22)指摘のように、アイデンティティとは、ズレがあつて問題となるものであり、揺らぎがあつてこそ、問題になるものである。筆者はこの点を、主観的な違和感として捉えて、その違和感が生じる、日常の生活の場として、居場所に着目したのである。また、西平は、個人の生涯発達における生活全体を包括したものを、「全生活空間」と呼んでいるが(西平,1983,p141)、この全生活空間を捉える視点は、個人の生涯発達を、鳥瞰図的に捉えるものということができる。これに対して、居場所を捉える視点は、その鳥瞰図的な視点から、着地して見る視点であり、しかも、着地して個人が主観として見えるものを捉える視点であるといえる。この鳥瞰図的視点と主観的視点の違い及び関連性は、今後さらに検討していく必要があると考えられる。

本論では、居場所やアイデンティティを捉えるために、現象学的方法を試みたのであるが、そこから明らかになったものは、何か。居場所においても、アイデンティティにおいても、主観的な違和感や居心地の良さなどが生じる根底に、ここで示したような心理社会的価値観があるということである。エリクソンが、移民や移住、もしくは自分とは異なる文化の到来において、個人においてアイデンティティ危機が生じることを示したが(Erikson,1959)、そこで個人が葛藤にさいなまれるものは、ここで示した心理社会的価値観といえる。つまり、現象学的方法を適用することで、アイデンティティ危機の背景にあるものを、個人の主観のうちに明らかにすることができるといえる。

また、今後の考察において、価値観よりさらに適切な言葉が見つければ検討していきたいが、ある価値観、見方があつてこそ、違和感や居心地の実感が生じるということが明らかにされたことは、現象学

的方法を適用したことの第一の意義であると考えられる。さらに、価値観と本論で名付けたものは、固定的なものではなく、揺らぎ、動き、影響を受け、又、確信を持ち、というダイナミズムを示していると捉えるのである。この心のダイナミズム、動きに対応して、人は新しい居場所を求めたり、また、ある居場所を去り、また、今ある居場所をなんとかしようと試みるのであるといえる。

また、アイデンティティにおいては、繰り返しになるが、居場所における心理社会的価値観を、実存的視点でもう一度捉え直したものが、アイデンティティの感覚を生み出す基準となると考えられる。居場所を挙げる基準と、私が私であること、自分が自分であることの基準は別々にあるのではなく、居場所の視点から見たものと、実存的視点で見たものの違いである。もしその2つの視点で見たものに、対立や葛藤が生じることもあり得る。このことが、また、新たな居場所を求める活動へとつながっていくものと考えられる。このような、居場所の基準と実存的視点つまりアイデンティティの視点のつながりをさらに、明確にしていく必要があると考えられる。例えば、ある居場所の基準、つまりある心理社会的価値観が、その個人のアイデンティティを左右するような心理社会的価値観となるのはなぜか、という問題が生じてくる。

以上のように問題点は山積しているが、本論で示した心理社会的価値観と名付けた、その領域に、光を当てるとそこは、心がうごめくダイナミズムの世界であると示したことが、居場所及びアイデンティティに対して、現象学的方法を取り入れた第二の意義であると考えられる。

引用文献

- Blos,P 1950 On adolescence. The Free Press. (野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信)
- Erikson,E.H. 1959 Psychological Issues : Identity and the Life Cycle. International Universities Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Husserl,E. 1954 Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phenomenologie. Husserliana Bd.VI, Martinus Nijhoff. (細谷恒夫、木田元訳 ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 中央公論社)
- 溝上 慎一 2002 アイデンティティ概念に必要な同定確認の主体行為 梶田叡一編 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版
- 無藤 清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究27.
- 西 研 2001 哲学的思考 筑摩書房
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
- 西平 直喜 1983 青年心理学方法論 有斐閣
- 小沢 一仁 1998 青年期のアイデンティティにまつわる問題の起点 東京工芸大学工学部研究紀要第21号
- 小沢 一仁 2000 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部研究紀要第23号
- Sullivan,H.S. 1953 The Interpersonal Theory of Psychiatry. W.W.Norton. (中井久夫他訳 1990 精神医学は対人関係である 誠信書房)
- 白井 利明 1998 a 学生は居場所をどう捉えているのか 日本青年心理学会第6回総会論文集 テーマセッション「青年心理学から見た居場所の問題」話題提供
- 白井 利明 1998 b 若者に居場所はあるか 大学進学研究 13号
- 竹田 青嗣 1989 現象学入門 日本放送出版協会
- 都築 学 1998 キャンパスにおける大学生の居場所 日本青年心理学会第6回総会論文集 テーマセッション「青年心理学から見た居場所の問題」話題提供